

近藤 鎮三譯
母親の心得

下篇

224

17

2



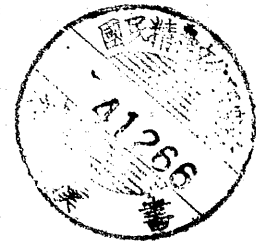
母親の心得下篇

目録

智恵の發達并ニ五官の作用	一丁
智恵の發達と助くる事	二丁
小兒の遊ばせ方心得	七丁
言語の教へ方	九丁
思慮の力と進むる事	十三丁
母親の教へ方并ニ學校の教へ方	廿二丁
讀書の事	廿八丁

目録

母親の心得 下篇 目録 近藤大蔵



41266

母親の心得下篇

近藤鎮三 譯

○智慧の發達并は五官の作用

○初生の小兒のいままど智慧の了簡もなき者なれども人間より元來智慧の機關具りあるゆゑ月日を経るに從ひ次第に英敏ある者あり抑も人間の頭腦はその靈魂のやどる場所なれども初生の兒の頭腦のいままど成就せざるが故に生れて三四ヶ月を過るまでには知覺も了簡も發せざるを得ず恰も夢中の人の如く只其身體は激しき

母親の心得 一 篇 近藤氏訳

感動あればこれ不應^おざる。反動^{はんどう}を爲^なすのみ固^{かた}より快^かきも快^かからぬも知^しることあ^まく内外^{ないがい}の苦痛^{くつう}又^{また}い食物^{じきじ}を求^{もと}む時^{とき}に泣^なきけ^けぶのみ是^{こゝ}も其^{その}苦痛^{くつう}を訴^うんとすの真意^{まごころ}より發^はせらる^るよ^よあ^あず生^なれて二三周^{さんしゅう}より初月^{しつげつ}を過^ある頃^{ころ}又^{また}至^{いた}りて精神^{しんせ}の感動^{かんとく}と起^おきに似^によ^よとあ^あれども是^{こゝ}又^{また}五官^{ごくわん}の感動^{かんとく}は^は真^ま又^{また}精神^{しんせ}より發^はせらる^るもの^{もの}は^はち^ちら^らん^ん五官^{ごくわん}の感動^{かんとく}を始^はむる^るハ早^{はや}きもの^{もの}より其^{その}作用^{さよう}神經^{しんせ}は傳^{つた}へて精神^{しんせ}と感動^{かんとく}せ^せむることあり○凡^{たゞ}と五官^{ごくわん}の作用^{さよう}ありと腦^{のう}より各部^{かぶ}は通^とざる所^{ところ}

の神經^{しんせ}の所作^{しやくさ}あり目^めの物^{もの}と視^し耳^{みみ}の聲^{こゑ}と聞^き舌^{した}の物^{もの}を味^{あじ}ふ^ふあ^あと總^もて身^み體^{たい}の作用^{さよう}は神經^{しんせ}の致^{いた}す所^{ところ}あり^{あり}されども生^なま^まと凡^{たゞ}そ一年^{いちねん}間^{かん}の神經^{しんせ}の作用^{さよう}も足^たば漸^{しだ}く頭^{かぶ}腦^{のう}并^{なら}び脊^{せき}髓^{ずい}全^{ぜん}成^{せい}せらる^るよ^よ從^{したが}ひ其^{その}作用^{さよう}鋭^{えい}くありて見^みるもの聞^きくものお^おつき其^{その}何^{なに}なる由^{よし}と分^わ別^{べつ}し得^える^るよ^よ及^{およ}ぶ^ぶあり腦^{のう}が全^{ぜん}身^{しん}を支配^{しはい}し得^える程^{ほど}は成^{せい}熟^{じやく}せらる^るハ六^{ろく}歳^{さい}より八^{はち}歳^{さい}の頃^{ころ}より智慧^{ちゐ}を開^{ひら}き自^{みづか}ら思^し慮^{りょ}と起^おこせ^せらる^るハ此^{こゝ}時^{とき}より始^はまる^る 諸^{しよ}事^じはよく意^いを用^{もち}て

其為べき義務と盡さば其返報より小兒が健康
小成長し且智慧も次第に進むと見るの幸福あり
り小兒の始めて笑顔とあはれ其母と知る徴なり
り手を動かし母と取つき聲を聞き知り喜び
て勇立つ等の舉動と見れば他人をいと愛ら
しく思ひて止まざるものなり況てや其母親の
心の歡べきこと幾何をらん斯の如く小兒の
健康も成長し智慧の進むに従ひ夫婦の間益々
睦しくあるものなれば生涯の幸福は母親が小
兒を愛育するに基きしものと云べし

精神の教育は小兒の成長の度と量りてられ
為はべし母は小兒の意見と造る者として父
は母の教へ込る意見と造る者として父
學問と禮儀の道と教へて益其智慧と進める
者あり兒と育つる者の前後と論せし父は母の
後にありされども又母の耕しし良田も父が
良き種と蒔ざればよき果實と得ること能はば
されば小兒の教育は父母の合力より始めて完
全きものものと云べし
前文の事左の如く耳新しき理より既に

往古希臘羅馬の世は小兒の教育に母親の大切な仕事なりことを當時の學者も論じたりき又實は當時の名高き人々も附て其例多し其二を云ふとセーサルの母のアケレリヤ又アウガストスの母のアチヤの如く何れも賢婦なりて其意見心情を以て其美性の小兒を育ぶるより此豪傑を作りたること疑あり

○小兒の智慧の發達を助くる事

○夫人の身體はそれ又適當な滋養ふきを得ず精神も亦然なり小兒の身體と養ふ始極て淡

泊にして消化し易き食物を要す小兒の精神を教育するも亦是と同じく淡泊にして慣習せしむる且理解し易き事より始むること肝要あり先づ物で教ふるより其實體を見せし是を會得せしむべし母なるもの心情として其兒の餓て乳と飲んとせむと意とせぬことあり今小兒の智慧づく時は當て其發達を助んと思はざること亦決しけりべからば是を教へ其發達を助るより面倒なること多しれども必だ厭ふべし小兒の智慧發達を始は先其母親の顔を

見知り聲と聞分けて其居る方以目とつけ又
其目の先は物と動かせば其行く方と見又の掲
けしる時機の鐘の聲と聞知る等のことなり借
斯の如く智慧づく頃に至らば物と見せ聲と聞
きて成丈け其耳と目とと慣らすの精神と教へ
育る始めの最要ある術ありされども食物も過
まば胃腑と損し消化を妨げ終は成長の害とふ
ると同理して精神も亦餘は勞せば自ら衰弱し
て智慧の發達と妨るが故又小兒と急速は智慧
者となさんとせば却て其腦力と弱し又の腦病

と起きしむることわり通例幼穉より餘り智
慧あるもの成長して愚鈍の人に變むること
多し

母親の小兒が乳を飲んとて其容體を爲す程の
智慧已は發する頃又の先坐側に有合ものを指
してこれと教ふべし其視る品物の成丈單純
にして且醜かぬものを選択ふべし長く見せて
居るの如く又彼是と餘り種々の品物を引更
て視るの疑惑と發すの基にく宜かれば小兒
の智力淺きゆゑ強く教んとせし其心氣と勞を

ること甚し儲て見たる物の形又聞する響も清
快ものと擇び成丈善美ものと用いて善良の心
情とありやうありべし先音曲ハ調子の整いと
るもの畫紙の類ハ小兒の愛すべき色合のよき
もの形よき品物静ふ多話一方と用ひべし小兒
は向ひてハかりせめにも悪き顔とふさぐ悪き
言と吐かず又喧嘩口論等の粗暴き事と慎むべ
し皆小兒の精神ハ害あり小兒の智慧を開く為
に見せて教ふる品物ハ先づ家内ハ有合ふものを
用ひ漸く又戶外ハ出づ種々のものと見せ次第

にその分別と教ゆべし而して奇怪のものハ見
せず奇怪の話ハ聞せぬと良と悪小兒と教ふる
ハ先第一物の形と知らしむること肝心なり譬
ハ圓き盤と四角の盤との異形を示し又平圓形
と球圓形との類を見せそれより日用の茶碗皿
鉢等と出して其名を教へ戶外に出でし園中
の草花小石等の名を教ふべし耳目の作用と發
達するに法あり小兒ハ目の力遠利りハ初ハ
遠近の區別と知らず月星とも手ハ探んとし又
物ハ我の面前にありと構はせしと前に出んと

も音聲を聞き亦斯の如くされば其作用をひき
 發すこと肝要あり先内外と論ずべ處を定め小
 兒の預て好む品物と居置之を目的として母親
 の小兒を抱て其目的を指して近よるべし、さす
 る時凡そ何程の距離を其品物々小兒の目
 がつくりと知べし又其翌日に至りて前日の如
 くせば此度の距離や、遠くと目又つくべし
 又次の日また其物を取替て距離もや、遠くと
 べし又時として、母親自ら遠方より小兒又向
 て進み寄ふどのこと、視力を強くするによき

方法あり聞カも亦これと同譯ゆゑ常々聞馴た
 る音聲と近より次第と遠く隔て早く聞つくる
 やうに慣しむべし

○小兒の遊ませ方

○夫を遊嬉ハ小兒のときの勤にして母親のよ
 き訓導は因らばその事業と運動との助とある
 べし小兒の遊嬉ハ生て四五箇月を過るまでハ
 さまで肝用もなく唯母親の考にて小兒の害
 とならばきこと又ハ氣儘に成長するを防ぎ
 横ある心の起ぬやうに育ること緊要なり

成長して後ハ此方法を以て智慧と開くを得べ
 如何者小兒ハ成長するに従ヒ品物と玩弄つ
 何時ともなくその品物の性質までも識別ま
 る智慧を發せられバあり
 遊嬉ハ小兒の心と樂しめ且つ其玩弄品物を知
 らしむる功用あり玩物ハ折々しりかへて與ふ
 まバ小兒の心と喜ハこと愈深し何時も用品ふ
 まバ小兒ハ其奇しかりぬより厭て喜ば終ニ
 毀して其形の變ろと喜ぶ是ハ其毀を好むハ
 非ぞ其品の形の變ると見んとしてあり

故に小兒に與る玩品の堅固のものより種
 々に變ぢるものと良とす、れども餘り毀れ易
 き品を與ふまバ其毀ることと面白く思ハ何
 品によろシ打碎んとするの思念を起さなり又
 とれが為ニ手足を傷れ怕あり母親ハ種々の玩
 品を數多く貯かき時々とりかへて與ふべし然
 るれば小兒も脱び種々の物品を覺ゆるの益も
 あり小兒成長して其智慧漸進まバ我獨遊て滿
 足せず我と同位の年齒の小兒と交りあそぶこ
 とを好むものゆゑ此項にハ善兒を集て交遊せ

一むべし○母親并傳婢のよく意して小兒の前
 まで害とあるべき危事となり又小兒の遊居
 る傍に火或の榴附木の類を置くことを禁むべ
 し往々是等より大害と引出せしことあり
 偕て小兒其同胞又の遊朋友と交り遊ぶ頃は母
 親の能く氣と配り苟且にも禮儀を害するやう
 のことあらば嚴しく制してこれを止むべし又
 男女の其遊方別あるべし男兒は男の遊を爲
 しぬ馬は乗り車して走り操兵の遊の類女兒に
 は女に適へる遊を教へ専ら家事と調理する事に

慣しむべし男女打交りて遊ぶ時の男の女に向
 いて物柔ふる振舞を為しを教ふべし不潔の
 遊の禁をべし身體衣類の汚穢るを厭えぬやう
 になれば終る其精神も自ら汚穢とあるをり
 右に説所の只遊嬉の小兒を養育するに肝要な
 る事と云ふのみも其遊むせ方の如何と知ん
 と欲り夫の有名の教育家あるフレイベル氏
 の著せる幼穉園の書あり就て其要を求むべし
 ○言語の教へ方
 ○小兒の其意と他の人に通ざるの始の容を以

てあること 獸類の頭尾をもて應對するに同
其譯の小兒いまだ言語を知らず其の智慧未
に由てあり次第に智慧を増し心意發するに従
て母の發言と口の動方とに氣附け漸く其を
真似て終つて發語を知り而も其意味さへ何々の
譯あることも自ら會得し時に望て其語を用
るに似るの造化の奇妙と謂べし而て發語の人
類に限りて天より特別の恵りある幸福あり
小兒單一の五音を發し得るに耳の開は始る期
よりあり 語の固語と組立たるもの又語の數多の

音の集りて成るもの也小兒に語を教るに
先つ五音より教へ漸く話に及ませし小兒の母
の言ふことと聞き真似て次第に言語を習覺せ
るゆゑ生ながら聾のものことと學ぶに由不
く終つて啞とあり 啞者の發音の機關具はど
耳の聽えぬより發音を習ふことのためならぬ也
に然る者多し耳よく聽得て發音の出来ぬもの
は是れ全く發音機關の不具なるゆゑあり ○聾
啞は學問を教るの術種々あり殊に啞者に發音
を教て平人の如く自由に對話せしむるの方法

母親の心得
十
直藤氏藏

近年の發明にて最調法なる工風あり。借て小兒の母親と互に其思意と通る期に至まば母親の顔色、目遣などの様子より其愛をる。叱らうと察せること甚疾。又其期にハ母親も其兒の容子と窺ひて其思ふことと察して違ふ。母と兒との斯の如く自然に其情とよく通し得ること速けれハ言語と教るも容易く又習ふも甚ど速くあり。始め又ハ真似し易き小兒の言語より教ふべし。小兒の言語とい譬ハ食物のことをウマく手の事をテ、と教あらの類と云ふ。但

綴字の句とよく切て物名ハ其實物と指て幾度も繰返し話せば、さそれハ小兒ハ發音と習覺へ且其語の譯を知るべし。其語ハ「ム、ブ、グ」等の唇の音と以て始るものハ言易し。小兒の發聲ハ其思意と自ら云ひ出その初めれば教むと出来るもの。即ち食物を請ふて泣き又ハ叫ぶとられなり。之と自然の發聲といふ。生まて六ヶ月程も過て智慧漸く進まハ思意と云出をに他の工風と用ひ己ハ心に適時ハ悦で笑顔となり。又其心に逆時ハ號泣ぶ等の容子と

方々に至る是皆其思意と他人に通し示すの工
 風或ハ術てにして之を形容話ぎやうごといふ
 借て頭腦完全まうごなり智慧進むに従ひかの形容話
 ハ言語と入代りて終に止むあり○小兒ハ他人
 の話を聞き覺ゆることの早きものゆゑ二三の
 言語と覺ゆれば暫時にその數多と習ひ得て何
 事とふく頻りに對話たいごされども思意定まらぬゆ
 ゑ一つの話を終らばして他の話に移り彼是紛
 雜まじして取留めあり其思ふことと具ぐに他人の話
 一得るハ智慧進み十分の思想しやうしやうをいさす項いへ

選いは後日のことなり○小兒の話せる項いは智
 慧の發達殊に迅速にして母親も意外のこと多
 しさればよきことありきことも習ひ覺ゆる
 こと速かなるゆゑ母親ハ能く注意して發音の
 訛まじ言語の不正ふま又ハ語路ごろの前後并なは野舟のゆの話を
 交へて話をことなうるべし小兒の言語のあり
 きハ聞ぐるきく母親の不ふ注意ちやういより來ること多
 し小兒ハ只他人の話はなを聞き眞ま似にするものよ
 て素より其善惡ぜんあくの分別ぶんべつなけきハ母親又ハ傳たへ
 の言語正ただけきハ即ち正ただき言語と覺え惡わるけれハ

悪きと學ぶ但し幼少の時に覺えたる語訛ハ成長の後に改むることか^く言語の誤に二様あり一ハ發音の誤よ^て例ハ（日本文字の）灰をヘイと誤り火をヒと訛るの類是あり又一ハ言語用法の誤によ^て俗語ハ往々其字義を誤りて不當に用ゆるものなり

又連續せる一話則一文章の中にハ大切なるテ、ニ、ヲ、ハと誤るあり是總して言語の誤あるハ始より是等のことなき様よ正しく且明了に教ふること緊要なり母親ハ小兒に言語を教ふる

よハ其正しく話し得るまでハ幾度も繰返し教ふべし、も^も小兒ハ座傍の玩品を取らんと求めバ先其名を云き^せよくこれと云ひ得ると待ちて而して後ち取て與ふべし又畫本の類と見せて其中に畫ける鳥獸草木類の名と教へられと言へしむると良きことあり斯の如く單語より始め既に短き話と教へ得る項よハ短くして覺へ易き歌と教ふべし歌ハ文章の接續并は口調善良ければ記憶を^りに易し

○思慮の力と進むる事

○凡そ思慮といハ物事の理合と彼是と比較して
 これと心に會得せると云ふ成人よりて心意散
 亂して考の淺きものなり、又早解せらるる似て實
 ハ思慮の足らざるものなり、是等の抑も何の為
 又斯の如くかり行くものなり、夫は人の身體も使
 役ことなく且剛むることあけまば怠惰柔弱
 とあること必せり精神も亦右の理合又同く
 考力と使ふことなれば進むことあく必を愚
 昧の人とならば其作用の英敏ならんことと
 要すれば適宜にこれと使用すべし、も兒童の

時に此事なくして壯年に及びて俄に思慮と出
 きんとなをも決して能はざる精神の適宜の使用
 とい即ち物事とよく思慮せらるることなり母親ハ
 兒童の思意の力と引起ことと勉べ前は言ふ
 所の成人よりて思慮の鈍ハ兒童の時に母親が
 其心育と怠りたる為に然る者多し、この教育と
 怠り其時と誤らば後日浪擲も其智慧の鈍きを
 如何ともせざるべきなり如何程勤學とあすも其
 不足と補ふこと能はざらば
 夫は智慧と知識とい別事なりよく物を習ひ物

名と知る小兒と智慧ありと云ふは甚ど誤り
只學問の^{ぐえ}い^てへ無活の器具に同ト無活の器
具と集列して如何程多く所持するとも只他人
の耳目と悦び^いや^ぐたり自ら廣く諸物を比較
し其異類の理と考ふることおくば少しもこと
と^つ用^をることな^し十二年の兒童の好ん^ば
奇品珍器を集めよく其名とも知るものかれど
も其物品の成分より性質を知るもの稀あり其
故に兒童の思慮尚いまだ足ざればなり
小兒の體育ハ母親の導きによりて如何にもお

るゝ如く其心育も亦其導き方善けまば早く思
慮を起^ますべし思慮おけまば事物の道理を^し解^る
し其關係を知るを得^るを^し借^て小兒のいまだ思慮
なくして只其心は浮むことと言ふ頃には母ハ
特に意を用ゐ其思慮に^あ誤^らず^に教へ導
くべし但し小兒の心情ハ自ら母親に似ると
のゆゑ母の責輕^くなり母親ハ小兒ある物と見
るに能く其形體と性質とを察し^てこれと他物
に比較し考ふるやうに仕向^かべし是等のこと
ハ母親の才能又ハ傳婢の識力と要する

づいば只専ら愛育の情と公明の心と以て教導を
 るを肝要となすのみ母親が眞の情愛と以て教
 へ導らば六ヶ敷方法と用ずとも教育の眞意と
 誤ることなからるべし

小兒を教ふるに或る疑問と設けて其事理を思
 考せしめば終に其疑を氷解し自定の心と起を
 べし思考の注意より始まる注意の反對の放意
 あり(放意とは或る一事に心を向けさ)されば放
 意の思考と妨ぐるものなり小兒の或る事物の
 内外の形質と思量して其思量せることを記憶

せんと欲するやうに仕向くまの注意心と起と
 ものゆゑ疑問と設くるも意思と起を起さず事
 柄と起す且其疑はき事柄と他物に計較し
 てこれと辨識するやうに教ふべしこれと教ふ
 るに譬ひ先つ石と見せて其他物と異なる所を
 説き示し後に畫本に就きて兒童の石投の畫を
 見せ此石は先きに見たり石なりと教へ示し又
 家を建つるに此石が肝要なり杯石の要とも
 教へ示さべしさて其後小兒と伴ひ戶外に散歩
 し道路ふあり石を指して尋ねべし見よ是は

何物なりや」と又小兒をして其物によく注意せしむる爲め尚其上に「この石の如何に美うらげや」と氣を付け、さき母親の自ら其石を拾取ひらきとり小兒をして心よりこれと拾ひらくと思立しむべし斯くすすとも尚も拾ひらくとするの心を起さざれば又「や」其石を拾ひらひて能く見よと心附くべし、これと拾取ひらたれは其形色堅柔輕重并かたまりは其名稱等を尋ねべし而して此石の何處に産うまると又何の用にあつらう又これを以て何を造らうと教ふべし且先きに畫本に見たる石も是あり

投けて中らば人と傷きふべし又其投なげて落おるは如斯かくの理合あり又石を以て家を建たてるには斯かくなるなりと石を就つきて起る種々の事柄を教へ示さべし而して母親は石と他の物とを比較して其物質の差ちがいと説いき示さべし斯かくの如くせば小兒は其教へ方の面白さに自ら新に物を見出してそのことを問ひ聴きくと欲ほむるの心を起さあり是を思慮を進め理解をよくせむ爲めの演習あり儲てこの演習の間は考が外事に散ちらさるるなどの妨さ碍がいを防ごぎ置くこと肝要なり

演習の間に他の物の邪魔せらるる折角に心を
向けざる石の話も忽ち他に移り思慮の向きは
一つの物石の事によく歸着せず一つの木とせよ
所の意思を造成して其物の性質及び有様をよく
心の中に覺ゆること能えば、その其間に其物と
他のそれに類似するものと又全く異なるもの
とを静ま心の中に計較せんと得ざればなり今
爰に例に用ひたる石の思慮を起すの原素は
てこれと比較する他物はこの原素より生ずる
性質ある重き堅き其形并に利害等と知り究む

る爲めに引用せらるるものなり、さてこの石の
性質有様と極むる爲めの比較に引用したる他
物例へば動物の類植物の類の別は固有の性質
有様と異なるものゆゑ又新に思慮を起すの原
素とあるさて斯の如く或る物と他の物と比較
して極めたる思慮を決着とつた例へば石の性
質と極むるにこれを樹木に比較して考ふまは
木は枝あり葉あり年々に成長されども石に
はこの性質なくされば石と木とは全く別物な
りと定め決まらば如く以上のことハ性理學の

論ふ渉るをもて解し易らばさく母親が或る
 一物と採て教める時に小兒の心が他の物に紛
 る散りておちつゝざれが強てられと責めど、ま
 つ其心と紛らすもの、他にあらと見出してこ
 まと除き去るべし些少の物に心の轉ことあり
 例へば坐右に蠅の群りたるあり又ハ壁の漆或
 ハ母親の衣裳の美やうなる等又因ることあり
 斯く小兒ハ他物に心と奪ハま餘念おけまハ母
 親ハ暫く前の話と止てそのものに附きて更に
 話と始むべしされども兒童の心の然あらぬに

ハ其話を半途に替ることとる、さく小兒ハ幼
 きほど勞も且倦易きゆゑかの思慮の演習も小
 兒ハ倦屈せる様子なれハ早速に止むべし又母
 親ハ小兒の倦屈することふきやうに物事と教
 かるに其理合と面白く解き聞らすこと肝要な
 り、さすれば小兒も飽ことあく自ら其理合と質
 問し且思慮をるに至るべしされば先づ一つの
 物に就きて話を起し種々のものを引合に出し
 て解き、さく小兒をして其引合に出したる最下
 のものより話と起したる前の物に立歸て其譯

と問べー例へば樹木の枝あり、枝には緑色の葉
らり、木の葉の風の為めに動かし、風は人の目
よ見えねども皮膚には覺ゆるなり又其作用
は樹の葉と動かしと以て知るべし斯の如く話
し置きて後に樹の葉は動くや、何物に動かし
や、又木の葉は何色なりや、葉は何に着きてら
りや枝とは何にして冬何に屬するやと問ひ尋
ぬべし凡て容易き事柄より次第に進んで物の
色合性質等と教へ其後の物の關係を思慮する
ことと教べし物の關係とい其物のある場處の

模様高低數量尺度大小等と云ふなり數のこと
は先つ坐傍に有合少品より木片より實物と
算へ二つと云、數は一つのものと他の一つ
の物とを斯く合せたる數あり此錢と彼錢とを
合せば則ち二つと云ふ數の錢なりと教へ後ち
に若干の錢を積み小兒に向ひ吾に二箇の錢を
與へよと云ふべし斯くふして教ふまば早く物
の算へ方を覺へ且つ次第に思慮の力強くあり
て物を見せども心に計得るに至る凡て母親は
是等の事と話し教ふるには氣長よして耐忍を

昔とて小兒こどもを疑うたがひきことを問とはぐ怨うらみも其譯わけを
 説明しやうめいして倦うることなく且かつ苟う且かつも偽いつはりあるべ
 らば母親ぼとけの教しよふることの不正ふなりを知らば次
 第二ふたご母親ぼとけを疑うたがひ教育きように害あらぐべし此故ゆゑも
 答こたへに差支さしつかへし時ときハ偽いつはりと教しよへんより却かへて明あかり
 「其譯わけハ吾われも亦また知らば」と答こたへふるに如ごとく又また「其事こと
 ハ未いまだ汝なんぢにハ解わかすべからず成長せいじやうせば自ら解わかる
 べし」と云いふも可べからず又また一旦いつぱ約束やくそくせしこと杯はハ
 決けつして違ちがふべからば小兒こどもハ智慧ちゐあき動物どうぶつと異ちが
 なり母ははの教育きよに因よりて善よともなり惡わるともあり

而しかも母ははに能あたり似にたるものゆゑ母ははが輕薄けいはくなれば其その
 子こも亦また輕薄けいはくとなり兒童こどもを育そだつる者ものよく意いすべ
 きことなり
 借かて右みぎに於おいて思慮しよのことを述のべし此こゝは又また記き
 憶おくのことと説いへば記憶きおくハ矢張やじやう演習えんじゆによらさ
 まり其力ちからを強つよくする能あたはずこの記憶きおくカハ目めは
 視み、耳みみは聞きく物ものは限からざる思想しゆの記憶きおく事情じやうの記憶きおく
 等らなり記憶きおくの強つよきは物もの或あるは事ことの初はじめて已やまら
 心こゝろ裡うちに感かんずるの勢いきほカハ思慮しよの強つよまは由よしあり
 り記憶きおく力ちからを強つよくするに先まづ母はは親おやが或あるは事こと物もの

と以て小兒の豫て知る所の事物を思ひ合せ心に浮うまゝにむるやうになんべゝ小兒が既に忘れたることと復習せしむるの益ふし其心裡こころよりよく覺おぼりて今日前に思ひ出さぬことと遠廻とほまわりに思ひ出さしむべしされど小兒ふ解とかたきこと又ハ記憶し難きことと屢々復習して強て教へんとせむからず文章又ハ詩歌の全文と句分けして其各句の意味と説き明し後に小兒にして其全文を復習せしめ且暗誦くらんせしむるも宜し記憶ハ演習によりて強くあるものゆゑ母親

がよく教え込こめられハその力弱く小學に入りて暗誦の難きと困却こむべし○記憶ハ一旦覺えたる事と忘われず再び思ひ出さぬことなれば記憶の力と強むる爲めハ彼も是も種々の事を混まじ又理解せざる事を暗誦せしむること、はははは是等の事と暗誦せしむると只に心こころに銘記めいせしむる眞まことの記憶にあらず又多くの事を一時に記憶せしめんとせば却て小兒の記憶力衰弱じやくじやくせむ

○母親の教へ方及び學校の教へ方

○私宅と學校との教育は就て大なる感能かんある

ものよりて即ち母親と教師ハ小兒の智慧と進むる重任なり私宅よりハ母親ガ智慧を開くの基と作り學校よりハ教師ガ母親に繼ぎて愈いられと違むるものなりまづ私宅よりハ愛を以て教へ學校よりハ規則を以て教ふることを肝要なり五六年までの小兒ハ學校の教え方ハ益少すくし此年齢までハよく母親ガ教ゆべし小兒成長して學校に行く頃になりても母親ハ學校の課業を助け教師の届らぬ處を補ふべし偶小兒を私宅より自みづかり教えんとする親あまじも是より

宜きことよりハ假令たと母親ガ如何程の學識あるにもせよ小兒を教え育つるハ一つの術わざと易きことにはあらず且私宅にてハ學校の如く規則立ちて教授をふこと叶ハば又もハ母親ガ誤解して教ふることよりハ小兒の為めに害ふること勿論なりされど必非とも私宅より教ふることなりハ母親先づ自ら此術に熟むることと心掛くべし母親ガ小兒を手放して學校は通はしめば行儀いぎより小兒に交りて惡きことと覺え且學校ハ數多の小兒と一時に教ふるが故

必ぞ教授も行届かどと様々のこしと思ひ起し
 私宅に教師と雇ひて教ふるに如くことふし
 思案をものり是等の無益の思ひ過となり
 て學問の進みと妨くると教え方の善惡に氣附
 なけまば後日悔ゆること多かるべし固より學
 校の只に數人の為めに設けたるものにはらざ
 とパー入別に厚き教授と受くることと得ど又
 下賤の兒にて行儀らしき者なきにあらねし又
 其中にハ貴人の兒童も有り賢兒も有り畢竟學
 校にて是等の兒童と一緒に交り學いて益あり

と云ふハ互ひに競ひ合ふの意と引起すことあり
 るが故なりされば母親ハ些少の害と論ぜ以益
 あり方と採り小兒と學校に通ハむると良き
 ことと心得べし

母親ハ心情の教育と專とし學校ハ學術の教育
 と專としされば小兒の教育ハ母親と學校と共
 々に盡カセざれば完きと得ず學校に入る小近
 き年齢に及もく母親ハ其前用意の為め先つ文
 字の書き方より字體、素讀法、算術の大意等と教
 え始めハ讀本第一と以て綴字句點のことより

次第に進むべし習字の石盤の上に母親が先づ
書きて兒として其上をなぞらるべし右のこと
出来たまは短き文章を讀ましめ或は暗記せし
むべし其次は問題を出して其答をかきしめ
又は其欲することを書しむべし斯なせば小兒
は書くも讀むも同時に習ひ得べし又母親は
小兒の意に適ふやうの歌及物語の類を讀み或
は話ししことも暗誦せしめ又は復話せしむべ
し右讀書の替古と共は算術の初歩を教え始む
べし右の學校に入るの前用意はて此年齢を過

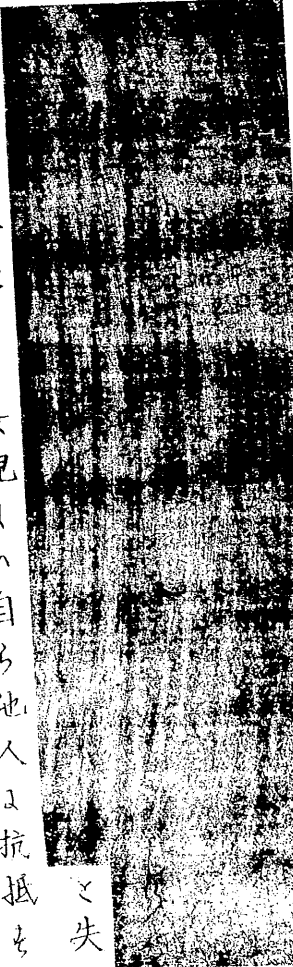
まは學問上のこと即ち博物學及び物理學地理
學の初歩を教へざるべからず勿論是等ハ小兒
の理解し易き事柄に限り決して高尚の理合を
解くに及ばず地理學と誦に地球儀を用ゐる
べし
皆て小兒が能く私宅の教育を受くまは入校し
て他の兒と共に下級の教授を受くるに差支ふ
し小學教員も亦右の如き前用意あるものと教
ふるに少しも面倒のことなし故に其學業の進
む方も極めて早し但小學に入るの前用意ハ男

女の區別なし、小學の下級の男女と別にせざ上級に至るとの教授の方法より學室までも全く分別有り、偕て母親ハ早朝より小兒の學校に往く用意をなす書物石盤等遺失モトなく調へ時刻の遅延せぬやうに意を盡し又歸宅せば其衣服及び書物と置くべき場所に置りしめ暫く休息の後ハ其日學ひたる學業を問ひ試むべし是ハ甚ど肝心のことなれば先づ右に言ふ規則通りの事と終らぬうち宅外に出いで自由に遊ぶことと許すべからば又母親ハ小兒が學校より受け

たる宿題と小兒の爲めに作りて與ふるハ宜しからず又その兄姉等の代りて作るとも固く禁じても一や他人の力と假りて作るハ非ざるヲ探らば、斯くせざれば小兒の爲に損多し○偕て小兒昇級せば次第に母親の教授と要せん尤も學力ある母がれば上級の課業も助けて教ふること善し殊に其勤惰と督責し書物學具等の整亂と檢察も何時も母親のなすべき處あり偕てその成長も從ひ男女によりて心情的教育ハ差異あると要す男兒ハ専ら智力と

開き、その國俗に慣れ且愛國心を發せりと最上の目的とす、されば國史を教えて國家成立の所由と知らしめ地理及び物理を教えて万有の理と知らしむべし是等の業を助くるは元來父親の責にべき事なり但男兒の智力の進む中途の年齢より暴行に陥り放逸に淪るゝの性質より又榮利を走るの心より尤もこの心の勉勵と起すの助となれば強て止むるも惡しけまども程よく制せざれば輕薄とある而して男兒の自身と護り他人に犯さるゝことふまやう十分の體

カ及氣力を造り且辛苦に堪へて生涯榮譽



と失

はぬこと肝要なり女兒は自ら他人に抗抵することと教ふるに宜しからば只柔和順従ふることにて美性としす男は右の如く活發の教育と受くべきものをなれば母親に預てその暴行に陥らぬやうに防くべし今時粗暴の惡少年多きを畢竟

母親の教育の届らざるに因るなり
 借て女兒の元來性質柔和なりゆゑ母親の男兒
 と違ひ教育の上にかまや心意を勞す。小及び
 七七八歳の女童の學校へ往くと喜ぶりの多し
 其故は新に校内の多くの小兒と共に學ぶること
 の面白さに因るなり母親もともに學校に往く
 ことと進むべし女は男の如く深き學問と要せ
 ず日用普通の學問とすこと肝心なり即ち讀
 書算術縫針の業と專とす
 女子の教育は前より云ふ如く博き學問と要せ

どといへども博く諸學に達する事もより益
 ありされども只高尚の學問ありて常事の學
 問は疎けまは不都合多し沓足袋を編み縫針の
 業とよくすれば貧人の女も以て自ら生活せり
 の資財を得ること易し殊にこの業は女の性質
 に適ふものゆゑ學ぶにかさうらび且職業とせ
 ざるも徒然を慰むるに極めて良し

○讀書の事

小兒は強く書物を読みしめる精神の健康と害
 む又書物を読み得るの年齢にかゝるとも初めの

程ハ餘計に讀むことと禁むべし幼少の頃より
 餘り書物のみ讀みて運動すること少きれば
 身體の成長と妨げ成年の後有用の人となり
 ざらざら將と亦餘計に素讀せれば其讀方自ら疏畧
 となりて意味を考ふること愈々淺く一冊の書
 を讀了もその事柄を明らかに解を能はば又あ
 るこれと種々の書物を讀まむるハ善うらび
 古諺ハ雜讀ハ人を愚ますと云へり
 讀書と以て智慧發達の助けとなさんには解
 易く且記憶し易きものと擇ぶこと肝要なり小

説の類又ハ奇怪の譚などハとろくも簡易の
 歴史紀行の拔萃各國の風習等を略説せるもの
 甚宜し母親ハこの書物と小兒と授くる前より自
 らよく通讀して小兒の質問に答ふべし幽明の
 場所并ハ強き火燈の前より讀書せらるるを禁むべし
 眼病の源因と引出すことあり

譯者此書を譯するは方り約ね身體教育と
 精神教育の二編を作りこれに脩身の論と
 加えて二巻と為さんことを定む上編の序
 文ハ其旨を記せり然るは精神の教育にて

既に適當の紙數をふせり今これ又脩身の
部分と加ふまゝハ紙數餘計として看者の厭
ふと怖る依て脩身の部ハ別冊として母親の
心得餘録と名けて他日發行すべく看客序
文の意は違ふと咎むるなから

母親の心得下篇終

明治八年十一月廿日版權免許

翻譯并出版人

濱松縣士族

近藤鎮三

東京本郷弓町三丁目十四番地住

賣弘書肆

東京府下書物問屋

島村利助

馬喰町三丁目